

【論文】 松本亀次郎の教育理念と実践に関する一考察

—松本亀次郎と周恩来の師弟関係を通して—

岩澤 平

日本大学大学院総合社会情報研究科修了生

Considering the Educational Philosophy and Practice of Kamejiro Matsumoto

—Through His Teacher-student Relationship with Zhou Enlai—

IWASAWA Yasushi

Former graduate student of Graduate School of Social and Cultural Studies, Nihon University

The purpose of this study is to consider the educational philosophy and practice of Kamejiro Matsumoto (1866-1945), a Japanese teacher who devoted his life to the education of Chinese students in Japan, through his teacher-student relationship with Zhou Enlai, the future Chinese premier, who was one of his students. In particular, (1)“The universality of Matsumoto’s educational philosophy and practice as well as his view of China” and (2)“The relationship between Zhou Enlai’s study abroad in Japan and Matsumoto,”are clarified by empirical consideration based on previous research and primary sources such as Matsumoto’s writings and Zhou’s diary during his study in Japan,etc.

1.はじめに

戦後すでに75年が過ぎた。日本と隣邦諸国との交流は、交通・通信の発達や経済的な相互依存に伴い益々頻繁且つ密接になっているが、決して十分な信頼関係が確立されているとは言い難い。否、むしろ隣国であるがゆえに複雑な利害関係や歴史認識の相違等から様々な問題が生じてきた。中でも日本語教育は、その時々国家体制や国際・社会情勢の影響を大きく受けてきたと言われる¹。例えば、戦前台湾や朝鮮半島において植民地統治の言語政策として、「同化政策」「皇民化政策」のために、「国語教育」の名で行われた日本語教育や大東亜戦争時にアジア諸国への侵略戦争遂行の手段として行われた「東亜語」としての日本語教育である。それらは、日本語を母語としない人々に対して行われた「強制的な日本語

教育」であった。一方、戦前同時期に5万人以上とも言われる中国人留学生に対して行われた日本語教育があり、松本亀次郎(1866-1945)はその中心人物であった²。松本は79年の生涯のうち40年余りを中国人留学生教育に従事し、魯迅や周恩来をはじめ2万人に及ぶ中国人留学生教育に携わった。また、日本語教育の黎明期に中国人が日本語を学ぶために編纂した日本語教科書でも大きな功績がある。特に中国をはじめアジアへの侵略戦争において、「軍主導の日本語普及政策にマスコミが追随して世論を盛り上げ、教育関係者はもとより、言語学者・国語国文学者をはじめ多くの学者文人がこぞって『東亜語としての日本語』『大東亜共栄圏の公用語としての日本語』を声高に主張した³時代にあつて、異論を唱えた。松本は決して政治的な人物ではなく、生涯、教育者と

¹ 関正昭(1997)『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク p.90

² さねとうけいしゅう(1981)『中国留学生史談』第一

書房 p.340

³ 関(1997)前掲書 p.39

して生き抜いたが、戦前の最も厳しい日中関係の時代に、教育者の立場から日本の中国侵略に異を唱え、時には当時の中国に対しても苦言を呈しながら中国人留学生教育に従事し多くの人材を育成した⁴。しかし、日本では戦後長い間松本については、一部の関係者を除いてあまり知られていなかった。彼の存在と功績については、むしろ中国からもたらされた。1979年、周恩来夫人の鄧穎超氏が来日した際に周恩来の遺言として、かつて日本留学時に世話になった松本への謝意を遺族に伝えたからである。この時、鄧穎超夫人は、「周恩来は日本に留学した時に松本先生に大変にお世話になったので松本先生にお会いしてお礼を言いたいと思っていました。しかし、先生は終戦後すぐに亡くなられたと知り、いつか日本に行って松本先生のご遺族にお礼を言いたいと常に願っていました。しかし、その願いをかなえることはできませんでしたので、私が周恩来に代わり日本留学時にご教授いただいた恩師のご家族にお礼を申し上げさせていただきます。」⁵と語った。これ以降、日中両国で松本についての研究がなされるようになり、彼の存在と功績も知られるようになった。周恩来(1898-1976)は、1917年9月から1919年4月まで日本に留学したことがある。帰国後は「五四運動」⁶を経て中国革命に身を投じ抗日戦争を戦い抜き、新中国成立後は総理として、日本との国交正常化実現(1972年)には一貫して主導的役割を果たした。

本稿の目的は、松本亀次郎の教育理念と実践の真価について、彼の生涯を俯瞰しながら、周恩来との師弟関係から考察することである。

⁴ 松本亀次郎(1931)『中華五十日游記・中華教育視察紀要・中華留学生教育小史』、「中華五十日游記」pp.9-11, 東亜書房

⁵ 李錦坤, 劉玉珊, 王貴書(2006)『中日関係中的周恩来与池田大作』中央文献出版社 p.94, (引用箇所は筆者訳)

⁶ 「五四運動」(1919年)は、中国の反日反帝国主義の本格的な民衆運動の始まりとなった運動。

⁷ 松本(1931)前掲書及び松本亀次郎(1939)「隣邦留学生教育の回顧と将来」『教育』7(4)岩波書店の引用に当たり、原文が旧字体のものは当用漢字に改め、促音

具体的には、以下2つの観点から考察する。

- (1) 松本亀次郎の教育理念と実践の普遍性
- (2) 周恩来の日本留学と松本亀次郎の関係

研究方法として、松本(1931)『中華五十日游記・中華教育視察紀要・中華留学生教育小史』、松本(1939)「隣邦留学生教育の回顧と将来」、中共中央文献研究室・中国革命博物館(1998)『周恩来旅日日記』(影印本)及び矢吹(1999)『周恩来『十九歳の東京日記』』等の一次資料や関連資料⁷に基づき実証的に考察する。

現在日本語を学ぶことで日本への理解を深め、将来日本と関係する仕事を希望する学習者は、隣国中国・韓国をはじめアジア諸国の出身者が圧倒的に多い⁸。従って、松本の教育理念と実践の真価について、彼と周恩来との師弟関係を通して考察することは、単なる歴史知識ではなく、今日の日本語教育において、一定の意義があると考えられる。

2.松本の教育理念と実践の普遍性

2.1 松本の生涯と教歴

松本の生涯と教歴は、小学校や師範学校で日本人を相手に国語教師を務めた前半生(1866 - 1903)とその後の中国人留学生に対して日本語教師を務めた後半生(1903 - 1945)に分けて考えることができる⁹。

松本は、1866年に静岡県掛川近郊の土方村に生まれた。明治の初期に新学制が実施され地元の嶺小学校に第1期生として入学した(7歳)。成績優秀であったため授業生¹⁰となり(11歳)、小学校に勤務しながら静岡師範学校の受験勉強に励み、苦学の末、

「つ」が並字のものは小字に改めた。またその他の引用文も含め必要に応じて下線を入れた。

⁸ 外国人留学生在籍状況調査(2018年5月1日現在)によると、外国人留学生総数は298,980人で、1位から10位までアジア諸国・地域(総数の約9割)、中国・第1位:114,950人(38.4%)と韓国・第4位:17,012人(5.6%)2カ国で全体の44.1%を占める。出所:文部科学省公式ウェブサイト、<https://www.mext.go.jp>(2020年8月15日閲覧)

⁹ 本節は主に平野日出雄(1982)『日中教育のかけ橋—松本亀次郎伝—』静岡教育出版社を参考にした。

¹⁰ 「授業生」とは、当時教員が不足していたため成績優秀な生徒による授業を補う制度。

同師範学校に入った(18歳)。その後も教職を務めながら研鑽を続け、1897年には難関の「尋常師範学校・尋常中学校・高等女学校国語科教員」検定試験に合格し(国語科免許状取得)、母校静岡県尋常師範学校の助教諭となった(31歳)。その後、三重師範(32歳)と佐賀師範(34歳)の教員を務めたが、特に佐賀師範時代に共同編纂した『佐賀県方言辞典』¹¹には当時方言研究に取り組んでいた東京帝国大学国文学教授の上田万年が大きな関心を示し助言を寄せている。この時期、清朝政府は日清戦争後(1895年)、アジアで欧米科学文明を取り入れて強国となった日本への留学を奨励し、日本を通して早急に欧米の先進科学技術を導入することによって体制維持を図った。1902年、東京高等師範学校校長の嘉納治五郎は、急増する中国人留学生のために宏文学院¹²を創設した。松本は同校に日本語教師として招聘され、15年間の国語教員を辞して転職して中国人留学生の日本語教育という新しい仕事に就いた(37歳)。これが後半生の教歴の始まりである。彼が同学院で日本語を教えた学生の中には後に中国文学の文豪となる若き魯迅もいた¹³。約5年間、同学院で教鞭を執った後、1908年、清朝より京師法政学堂の日本語教習(教師)に招聘されたため、同学院を辞して渡清した(42歳)。約4年間北京に滞在し、中国の生活文化に接しながら中国人学生に日本語教育を実践する機会を得たことなどの経験はその後の人生に大きな財産となった¹⁴。1912年、辛亥革命による清朝滅亡のため帰国し、東京府立第一中学の国語教諭に就任したが、中華民国が成立して暫くすると中国人留学生が増え彼らが松本に日本語の教授を懇願したため日本大学の教場を借りて日本語講習会を始めた。しかし、その後更に受講者が増え続けたため松本は意を

決して府立一中を辞し、1914年、私財と寄付により、「日華同人共立東亜高等予備学校」を創設した(48歳)¹⁵。同校は日本最大の中国人留学生の予備教育機関として発展し、常に千名前後の学生が在籍し、1917年には周恩来も入学している。しかし、1923年の関東大震災で校舎が焼失してしまった。彼は必死の努力で短時日に校舎を再建して授業を再開したが、経営が悪化したため、1925年、同校は日華学会¹⁶に合併譲渡され、松本は校長から教頭の職に就いた。1930年4月、中国教育事情の視察旅行を行い、翌1931年7月、その報告を兼ねて『中華五十日遊記・中華教育視察紀要・中華留学生教育小史』(以下、『遊記』と略称)を出版し各界要人にも贈った(65歳)。同書は日本の中国侵略に断固反対する意見を含む内容であったことから関係者への反響は大きく、松本は東亜高等予備学校の教頭を辞して名誉教頭となった。1939年、岩波書店の『教育』に「隣邦留学生教育の回顧と未来」と題する論文を寄稿し、日本語教育や留学生教育についての考えを述べた(73歳)。晩年は常に特高警察監視下にあり、1945年9月、終戦翌月に郷里で生涯を閉じた(享年79歳)。

2.2 松本の日本語教育の実績と教育観

2.2.1 松本の日本語教科書

松本は日本語教育の黎明期において、宏文学院で日本語教師を始めた翌1904年、早くも日本語教科書『言文対照漢訳日本文典』を編纂出版した。同書はその後40版も再版を重ねる異例の日本語教科書となったが、これにより松本は宏文学院の日本語教科書編纂の中心人物となり、同学院より『日本語教科書』全3巻が発刊された。彼が生涯に編纂した日本語教科書は、留学生だけでなく中国本土や台湾等の

¹¹ 『佐賀県方言辞典』は、日本で最も早い時期の方言の収集と編纂と言われる。平野(1982)前掲書 p.166

¹² 1902年1月、清国留学生のために東京高等師範学校校長の嘉納治五郎によって創立。初めは「宏文学院」と称したが後に「宏文学院」に改称。

¹³ 松本(1939) 前掲論文 pp.52-53

¹⁴ 二見剛史(2016)『日中の道、天命なりー松本亀次郎研究ー』学文社 pp.153-155

¹⁵ 松本(1931)前掲書「中華留学生教育小史」p.34に「日華同人共立」という校名は、中国人留学生・曾横海の精神的な応援に対する功に敬意を表するためであって経済的な理由からではないと記している。

¹⁶ 日華学会は、1918(大正7)年、辛亥革命によって帰国困難となった中国人留学生のために日本の財界が援助した寄付金で創設され、中国人留学生に種々の便宜を提供することを目的とした団体。

多くの中国人学習者にも活用された。松本が編纂(または彼が中心となって編纂)した日本語教科書は、以下の通りである¹⁷。書名、初版発行年、(重版回数)の順で記す。

- ①『言文対照漢訳日本文典』1904年(40版)
- ②『日本語教科書』全3巻 1906年(19版)
- ③『漢訳日本語会話教科書』1914年(17版)
- ④『漢訳日本語口語文法教科書』1919年(24版)
- ⑤『訳解日語肯綮大全』1934年(13版)
- ⑥『華訳日本語会話教典』1940年(2版)

松本の編纂した日本語教科書の特徴は、以下の点が挙げられる¹⁸。(1)国語教師としての知見を活かしている。(2)留学生の日本語学習の目的と要望に応えることを第一義とする。(3)中国人のための日本語教科書として、松本の中国語(漢文)の素養を活かしている。(4)対訳に留学生(学習者)の協力を得、留学生の意見を取り入れている。(5)宏文学院時代の同僚教師から、体系的文法記述の面で指導・影響を受けている。(6)国家体制・思想に関する題材を取り上げていない。

また戦前、松本の日本語教科書で学んだ中国人留学生は、以下の特徴を挙げている¹⁹。(1)いずれの著作も著者の長年の教育経験から、「文法」「会話」

「解釈」が三位一体となって編纂されている。(2)著者は常に著作に改訂を施し、時代の変化に合わせて内容が時代遅れにならないように手を入れた。例えば諺や俗語の解釈を増やしたことなどだが、これは当時の中国人に最も必要なことだった。(3)日本の歴史や地理、及び中日関係史も紹介し、日本に対する認識と理解を深めさせるとともに中日両国の数千年来の交流史についても系統的に理解できる。

さらに松本の日本語教科書を現在の日本語教育の観点から比較した研究では、次の様に評価している²⁰。(1)文法学習項目から見た場合、『日本語教科書』と『訳解日語肯綮大全』は、現代の初級の基本

的文法事項と考えられているものとの重なり具合は、それぞれ87%、82%と非常に高い比率を示している。(2)100年近い時間の隔たりを考えれば誤差のあるのは当然として、基本的文法項目をほぼ網羅しており編纂者の日本語教育能力の高さが示されている。

2.2.2 松本の日本語教育観

松本の日本語教育観は、特に松本(1939)「隣邦留学生教育の回顧と将来」から読み解くことができる。同論文は岩波書店発行の『教育』(「興亜政策と教育」特輯)に寄稿されたものだが、同誌が発刊された時代背景と当時求められていた「日本語教育」について注目したい。当時の日本は、1937年7月の盧溝橋事件以降、中国との全面戦争に突入し、翌1938年に第一次近衛内閣が「大東亜共栄圏」構想を打ち出すと、それまで全く無関心であった政治家、教育関係者、軍人等が突然「国語」教育に強い関心を向けるようになった²¹。なぜなら、「大東亜共栄圏」は台湾・朝鮮のような日本の統治する植民地ではないため、「国語」ではなく日本語を母語としない外国の人々に対する「外国語としての日本語」を普及する必要性が出たためである。1939年には、「国語審議会」と「国語対策協議会」が開かれ、「大東亜共栄圏」に普及する日本語の諸問題(文字と発音が一致しない歴史的仮名遣い、語彙の過多、漢字の多用等)が協議された。当時の議論で特徴的なことは、「大東亜共栄圏」における「日本精神を扶植する」手段として、特に中国の占領地における「日本語教育」が重視されたことである²²。『教育』はこうした時代背景の下で発刊されたものだった。しかし、松本論文は冒頭で、「隣邦の留学生教育には明治三十六年以後今日まで三十七年間の歳月を打込み、日本語の教授と著述には全精力を注ぎ、老生が直接間接に教育した学生諸氏は満支両国に充満して居られるので、さうした立場から

¹⁷ 汪向荣(1991)『清国お雇い日本人』朝日新聞社、p.243

¹⁸ 関(1997)前掲書 pp.143-144

¹⁹ 汪(1991)前掲書 pp.244-245

²⁰ 吉岡英幸(2005)「松本亀次郎編纂の日本語教材一語法型教材を中心に」『早稲田大学日本語教育研究』6, p.26

²¹ 多仁安代(2000)『大東亜共栄圏と日本語』勁草書房 p.2

²² 関(1997)前掲書 p.39

も聊かなりと卑見を述べべき因縁がある様に考へ」と述べているように、「中国人留学生のための日本語教育」という立場を明確にし、彼の日本語教育の経験や考え方を記した。中でも以下3点の論述には、彼の考え方が特徴的に表明されている。

(1) 学習目標を実生活に置くべきである

松本は、『興亜教育』も乃至其の補助を為す『日本語教育』も目標は実生活に即さねばならぬということを第一に掲げる所以である。…皆生活上就職上のたづきにしようとして居るのである。…実際の教授にたづさはらない者が机上で書いた日本語の書物が何の役にも立たぬのは其の為である」²³と述べ、どこまでも学習者にとって実利のある日本語教育であるべきとし、当時求められていた「日本精神を扶植するため」というような侵略戦争遂行の手段としての日本語教育とは根本的に反する主張を述べた。

(2) 台湾・朝鮮と中国人留学生の日本語教育の相異

松本は、「台湾や朝鮮で課する日本語は日本内地の子供に教へると大差は無い。なぜなら小学校から課するのであるから自然語学の教授法で理屈抜きに容易く口から耳に移すことができるが、留学生は専門学校卒業以上の者であるからどうしても組織的に規則を立てて一を以て十を推す方法でなければ承知せぬ。そこで同じ会話を教へるのでも日用会話よりも語法応用の会話、読本よりも文法が歓迎される傾きをもつ所以である。台湾や朝鮮で多年日本語教授に携わった老練な先生が其の経験を其の儘に留学生教育に試みようとして勝手違ひを喰った教師は其の例に乏しくない。」²⁴と述べていることから、当時の中国占領地での日本語教育者・山口喜一郎の「直説法」と大出正篤の「速成式」の論争²⁵についても承知していることが窺えるが、松本は自身の経験から「学習者に合った日本語教授法」を主張した。

(3) 興亜教育への希望

松本は、「日本の朝野は単に自国民教育に熱中し隣邦人の教育には余りに無関心であったと言はねばならぬ。…僕は数年前嘗て或席上に於て『文武は車

の両輪だ。対外的に軍に対する予算と同一額を対外的文化施設に用ひるのが当然である』と主張した。…興亜教育と言ふ事を唱へるならば政府が相当な予算を計上せねば空論に終ると考へるものである。…民心を把握するには恩威並び行はれねば駄目である。…興亜教育も其の一部を為す日本語教授も実利実生活に副ふ様にせねば無効である。」²⁶と記し、当時国を挙げて侵略戦争を遂行する時代にあつて、「文武は車の両輪」「民心を把握するには恩威並び行はれねば駄目である」と指摘し、また「文」と「恩」が軽視され、「武」と「威」ばかりが目立つ強権政治に対して、「興亜教育も其の一部を為す日本語教授も実利実生活に副ふ様にせねば無効である」と結論付けた。この発言は当時「興亜教育」とは名ばかりで実際には他国を侵略支配する手段として議論されている日本語教育に対する痛烈な批判であり、政策批判とも捉えられかねない主張だった。

2.3 松本の教育理念と中国観

松本(1931)『遊記』には、彼の教育理念と中国観が数多く述べられているが、特に以下の点には時代を超えた普遍的価値を見出すことができる。

(1) 世界平和と文化国家建設に寄与する人材教育

松本は、「留学生教育の理想」として、「日華親善固より可であるが、予が理想としては、留学生教育は、何等の求める所も無く、為にする事も無く、至純の精神を以て、蕩々として能く名づくる無きの大自然的醇化教育を施し、学生は楽しみ有るを知って憂ひあるを知らざる楽地に在って、渾然陶化せられ、其の卒業して国に帰るや、悠揚迫らざるの大国民と成り、私を棄て公に殉い、協力一致して国内の文化を進め、統一を計り、内は多年の私争を熄め、外は国際道徳を重んじて、独り日本のみならず、世界各国に対しても睦誼を篤くし、巖然たる一大文化国たるの域に達せしめるのが主目的で、日華親善は、求めずして得られたる副産物であらねばならぬと考へるのである」²⁷と記している。「留学生教育の

²³ 松本(1939)前掲論文 pp.51-52

²⁴ 松本(1939)前掲論文 p.52

²⁵ 多仁(2000)前掲書 pp.18-23

²⁶ 松本(1939)前掲論文 pp.60-62

²⁷ 松本(1931)前掲書「中華留学生教育小史」p.74

理想」は、敢えて「日華親善」のためではなく、「日華親善は求めずして得られたる副産物」でなくてはならないと述べている点に特徴がある。なぜなら、当時語られた「日華親善」のための留学生教育には、「日本びいきの中国青年を作る」というニュアンスがあったからである。しかし、松本の「日華親善」とは「共存共栄」が大前提であり、決して「日本びいきの中国青年を作る」ための留学生教育ではなかった²⁸。即ち「為にする教育」ではなく、「無私・至純の心で学生が安心して楽しみながら学べる教育」でなくてはならないとし、更に将来は各界の指導者となり、文化を興隆し、国際ルールを遵守して各国と友誼を結べる有為な人材を育成することであると主張した。これは現在では、「世界平和と文化国家建設に寄与する人材教育」と表現できるが、当時このような考えを表明する教育者は殆どいなかった。

(2) 教育文化交流は相互理解の推進力

松本は、長年の日本の中国に対する強圧政策によってこじれていた両国の関係を改善したいと願い、青年教育と教育者間の相互交流による両国民の相互理解の促進を提案した。具体的には、「日華提携の実を挙げるには、過去の悪印象が、脳裏に薫染して居る老人輩よりも、寧ろ純潔な両国青年の目覚めに待たねばならぬ。…教育者の力によって、第一に両国青年の純潔な脳髓の中に、日華共存共栄の必要な所以を沁みこませたいものである」²⁹「両国国民相互の理解は、先づ両国教育者の理解から始め…双方から教育者の視察団を交換的に派遣するのは、最も有益な事と思う。」³⁰などのような提案内容である。これは前年の教育視察における中国の教育関係者からの要請を松本の立場で伝えたものである。戦前の日中両国間には、政治・経済・外交上において様々な利害対立があったが、そうであるからこそ両国の相互理解を促進するために教育交流の重要性を主張したのである。ここには時代を先取りした先見性がある。今日では世界各国で教育・学術・芸術・文化

等の相互交流が頻繁に行われる時代になっている。それは政治経済や外交レベルでの交流が往々にして利害関係の相反から閉塞状況に陥ることが多い中で、教育交流が相互理解や信頼関係の促進に果たす役割を広く認識されるようになったからである。

(3) 日中関係は共存共栄が両国の国是

松本は、『遊記』の随所で、日中関係について、「共存共栄が両国の国是」でなければならないとして、以下の通り主張している。例えば「日華両国は唇齒輔車の関係に在り、共存共栄は天命的に相互の国是であらねばならぬ」³¹と述べ、また「日華両国は原より兄弟の国である。共存共栄は両国相互の国是であらねばならぬ。」³²と主張し、そして最後に、「是れ余が最後に一言したき事項である。民国は今や民族的に目覚め『民国は民国人の民国だ。民国内に於ては、領土・法権・政治・経済・文化・教育の全般にわたり、他国の侵略を許さぬと云う思想』約言すれば『打倒帝国主義』なる思想は、可成り濃厚に行き渡り、…此の時に当り、日本人が、僅に一日の長を待み、依然として日清日露両役戦勝の旧夢より目醒めず、『個人主義だ、』『国家的観念が乏しい、』『全国統一など出来る者か、』『憲法政治など河清を待つ類だ、』などと言って見くびって居たら大間違いである。…民国は、今や眠れる獅子に非ずして、国を挙げて自覚し勇猛に帝国主義に反抗してをるのである。列強にして、此の後尚依然として旧時の压抑を加へば、民国は弥々反発的に奮起するのみで、压抑を加へた国に、何等の利益を将来せぬのみならず、永久に悪感を胎すばかりである。…己惚れと慢心は失敗を招く基だ。…予は我が国家を愛すると同時に、新興民国の新建設に対して、熱心に其の前途を祝福し、永遠に両国家の共存共栄を祈るの外、他意なきことを表明」³³すると結んだ。ここで『遊記』が著わされた時期が、「満州事変」勃発の直前であることに注目したい。当時日本陸軍・関東軍は、満州における日本の権益を守るために、満州の主権回復を主張する中国から、満州を切

²⁸ さねとう(1981)前掲書 p.355

²⁹ 松本(1931)前掲書「中華五十日遊記」pp.42-43

³⁰ 松本(1931)前掲書「中華教育視察紀要」p.123

³¹ 松本(1931)前掲書「中華留学生教育小史」pp.78-79

³² 松本(1931)前掲書「中華教育視察紀要」p.122

³³ 松本(1931)前掲書「中華教育視察紀要」pp.124-126
(下線は筆者による)

り離して日本の直接支配下に置くべく「満州事変」を画策し実行した。すでに「満州事変」が勃発する3年前の1928年には、東北部の軍事的支配者・張作霖を爆殺する謀略事件も起きており、中国での排日・抗日運動は益々盛んになっていた。こうした時期(1930年)に松本は、外務省・文部省の委嘱を受けて中国教育事情の視察旅行を行い、現地で具に実情を視察した上で、『游记』を著わし、教育者の立場から中国への侵略政策に対する反対を表明し、各界要人にも贈ったのである。その中には天皇側近・侍従長の鈴木貫太郎や「満州事変」の遂行責任者・関東軍司令官の本庄繁もいた。序文に、「予は原来熱心な親善論者で、切情の進る所、婉説するの邊無く、思はず露骨な直言と成った」³⁴と記していることから『游记』は単なる「教育視察報告」ではなく、当時の日本の中国政策に対する彼の意見を進言しようとの真情が読み取れる。しかし、その後日本は、松本の進言とは真逆の方向を歩み、「満州事変」「盧溝橋事件」「太平洋戦争」「敗戦」という結末を迎えた。この『游记』の歴史的意義について、戦前日本に留学し松本の下で学んだ汪向榮氏は、「二十世紀の三〇年代、日本が中国侵略戦争を発動する前夜に、松本亀次郎先生は中国を熱愛し、理解する心情にもとづき、中日友好を堅持する立場から出発して、公然と反対意見を提出した。…先生には日本政府の進める狂気じみた侵略戦争をやめさせる力はなかったけれども、ある程度は影響をあたえた。少なくとも、彼自身の態度を表明することによって、日本の民衆の正直な声なき声を代弁したのである。」³⁵と評価している。

ところで、戦前の中国人留学生の多くは帰国後様々な分野で活躍したがその中には「反日家」となるものも多くいた。このことに対して「中国人留学生教育の効果」を疑う声もあった。しかし、松本はこうした批判に対して異を唱えた。なぜなら、「反日・抗日」となる原因は留学生にあるのではなく、日本の誤った中国政策に問題があるというのが彼の

一貫した考えだったからである。松本は、「留学生教育の効果如何は、往々にして世人に疑はれる所であるが、予の意見では、留学生中から、中華重要な人物が、多数に排出して居るのを以て、効果の第一としたいのである。…一部少数の留学生が、偶々我が時々更迭する政府の政策に反対したからと云って、忽ちそれに色を付けて『某は排日の巨頭だ』などと言って、黒星にするのは、我自ら友を失ふもので、予の取らざる所である。」³⁶と記した。

松本は、留学生が日中間の政治的出来事に対して敏感に反応することを知悉していたので、日頃から留学生に学業を優先するように諭したが、一方で彼らの愛国心による行動を尊重し留学生の立場を守った³⁷。松本は教室内外の様々なところで留学生に対し「国家を愛せ。自分の国を愛せない者が、なんで他の国を愛せようか。中国は中国人民の国だ、決して他国からの侵略を許してはならない。中国人の愛国の心が高まれば、強い団結が生まれ、大中国建設の戦いにおいて、必ず勝利を収めることができるだろう」³⁸と語っていたという。それがために多くの中国人留学生が彼を敬愛し彼のもとで学んだ。その中には若き周恩来もいたのである。

3. 周恩来の日本留学と松本亀次郎の関係

3.1 周恩来と日本

「周恩来の一生は、日本ととくに密接な関係がある」³⁹と言われる。周恩来は、1917年9月から1919年4月まで日本に留学した。約1年7カ月と短い19歳から21歳の多感な青年時代であり、当時の日本は大正デモクラシーの民主的で自由な雰囲気がある一方で、軍国主義による中国侵略の動きが露わになる複雑な時代だった。そうした日本で生活して日本の政治・社会・文化また日本人の国民性等について注意深く観察し理解を深めている。周恩来は、帰国後「五四運動」に参加し、その後、欧州留学中に共産党員となった。帰国してからは中国共産党の指導者の一人として約25年間に及ぶ激烈な中国革命と抗日

³⁴ 松本(1931)前掲書「中華五十日游记」 p.1

³⁵ 汪(1991)前掲書 p.252

³⁶ 松本(1931)前掲書「中華五十日游记緒言」 pp.2-3

³⁷ 鷲山泰彦(2015)「周恩来の日本留学と東亜学校校長

の松本亀次郎」『亜州文化』32 pp.17-18

³⁸ 王永祥・高橋強(2002)『周恩来と日本：苦悩から飛翔への青春』白帝社 p.88

³⁹ 金冲及主編(1992)『周恩来傳 1898-1849』阿吡社 p.2

戦争を戦い抜いた。1949年、中華人民共和国成立に当り周恩来は初代総理となり、1976年1月に死去するまで27年間、総理として内外全ての国務に最高責任者として携わった。特に戦後国交のない日本との「中国残留日本人の帰国事業」「民間貿易協定の締結」等全ての対日外交政策に関し、一貫して主導的立場で対処し、晩年の1972年ついに両国間の「不正常な状態」に終止符を打ち、「戦争状態の終結」と「中日国交正常化」を実現させた。周恩来の対日外交政策の基本は「少数の日本軍国主義者」と「日本人民」を明確に区別する「二分論」⁴⁰にあったが、この「二分論」がなければ、日本にとって国交正常化交渉の最大の難題であった「戦争賠償問題」等を解決することは到底できなかった⁴¹。

胡(2015)は、「周恩来は、中華人民共和国建国後、初代国務院総理兼外交部長として戦後の中日関係の発展に傑出した貢献をした。彼の指導の下で、建国後二つの重要な対日政策と方針が打ち出された。第一に日本人民と日本軍国主義を厳密に分けること。第二に中日間の二千年と五十年の関係を正確に対処することである。周恩来の対日外交戦略と政策には、彼独特の日本観が体現されている。…周恩来は対日外交政策を自ら制定・実行し、中日国交正常化の実現に不朽の貢献をなした。周恩来の日本観形成には、幾つかの段階と側面があり、中でも若い時に日本留学で得た生活体験が彼の日本観形成に非常に大きな影響をもたらした。」⁴²とし、「二分論」には周恩来独特の「日本観」が表れており、その「日本観」には日本留学の体験が大きく影響していると指摘している。周恩来は、「わたしは十九才で日本に留学し、二十一才で帰国しました。ちょうど青年の頃でした。日本に対してわたしは良い印象をもって

います。働く人は勤勉で、自然の景観は素晴らしく、人々は温和で善良でした。中国を軽蔑する人もいましたが、ごくわずかでした」⁴³、また「日本での生活は日本にたいする深い印象をのこしました。日本にはきわめてすぐれた美しい文化があります。日中両国のこれまでの歴史は、たがいに文化を交流し影響し合う関係でした。ですから、正常な往来がつづけば、中日の文化交流は大きな将来性があります。その鍵は平和共存であって、だれしもそれに背いてはなりません。」⁴⁴と日本留学時に日本への良い印象を残したと語るとともに両国は「平和共存」でなければならいと強調している。一方、日本の中国侵略については、「1894年以後の半世紀にわたり、日本軍国主義者の中国侵略によって、中国人民が重大な災難を蒙ったのみならず、日本人民も深く被害を受けた。前の事を忘れず、後の戒めと為す。こうした教訓を我々はしっかりと覚えるべきだ。…日本は偽満州国を助けた。それは少数の軍国主義者がやった悪事だった。多くの日本人は良いことをやる」⁴⁵と語ったように、「一部の軍国主義者の侵略行為」と「日本人民も被害者」というように明確に立て分けた。これらは周恩来の日本に関する多くの発言の一例に過ぎないが、彼の「日本観」「日本人観」「中日関係観」についての特徴が端的に表れている。

3.2 日本留学の理由と目的

周恩来は1913年8月、天津の「南開学校」に入学し(15歳)、4年間の中学生を送った⁴⁶。同校は1904年に創立された欧米流の近代教育を目指した私立学校で、創立者の厳範孫は愛国主義的な思想を持ち、校長の張伯苓も著名な教育者である。同校で受けた啓蒙主義的な教育は、周恩来に大きな影響を与

⁴⁰ 「中国侵略の責任は当時の日本政府にあり日本人民も被害者」と区別すること。毛利和子(2006)『日中関係一戦後から新時代へ』岩波新書 p.22 参照。

⁴¹ 日中戦争による中国側の損害総額(台湾と旧満州は除く)は、終戦当時の価格で五百億ドルと算出されていた。毛利(2006)前掲書 p.32 参照。

⁴² 胡鳴(2015)「周恩来留学日本与其日本観的形成—『周恩来旅日日記』解説」『日本研究』(2) p.89 (引用箇所は筆者訳)

⁴³ 金(1992)前掲書 pp.2-3, 1959年12月、日本の友人との談話。

⁴⁴ 金(1992)前掲書 p.2, 1954年10月、日本の国会議員訪中団・学術文化訪中団との会見での発言。

⁴⁵ 曹応旺(2018)『周恩来の述懐』中国出版トーン p.22

⁴⁶ 本節は、主に、王・高橋(2002)前掲書、第1章「日本への留学を選択」を参考にした。

えた。特に当時は「対華二十一ヶ条の要求」(1915年)による日本の中国侵略の動きが始まり、中国は益々存亡の危機に瀕していたため彼は「祖国救済」を願う愛国的青年に育った。南開学校は比較的裕福な子弟が多かったが、周恩来の家は貧しく学費を払い続けられなかった。しかし、彼の品行と学力が認められ二年時から学費、寮費が免除となった。卒業証書には、「中学部学生 周恩来 年十九歳 浙江省紹(興)県人 中華民國六年 課程を修了す。卒業得点数八十九・七二」(周恩来卒業証書控 一九一七年六月二十六日)と書かれ、卒業式では「国文最優秀者」の特別表彰を受けている。特に創立者・嚴範孫は周恩来を「宰相の才」があるとして大きく期待した(日本留学の費用を支援し後に欧州留学も支援した)⁴⁷。なお、嚴範孫は松本と古くから交流関係がある⁴⁸。松本は「南開中学卒業の学生は従来多数に我が東亜学校にも入学したが、何れも一種特別の気品と風采を有し、自信の篤いものが多い、それが他学校出身の学生と著しく目立って見える。」⁴⁹と記しており同校の卒業生に注目している。1917年6月、周恩来は南開学校を卒業し、日本留学を目指した。当時、南開学校には「大学部」がないので卒業後更に学ぶためには欧米や日本に留学するものが多かった。日本留学を選択した理由は、当時日中間には「五校特約」⁵⁰があり、中国人留学生は指定された学校に合格すれば中国政府から官費留学生の待遇を受けられたからである。また周恩来の日本留学の選択には大きな目的があった。それはアジアの中で西欧の先端科学を早く取り入れ強国となった日本を実際に観察し、「祖国救済」の方途を見つけ出すことである。その心情を日本留学の出発前に友人に贈った惜別の詩の中で次のように詠い表明している。

大江歌罷掉頭東，遼密群科濟世窮。

⁴⁷ 曹(2018)前掲書 p.106

⁴⁸ 松本(1931)前掲書「中華留学生教育小史」 p.26

⁴⁹ 松本(1931)前掲書「中華教育視察紀要」 p.40

⁵⁰ 「五校特約」は1907年、日中政府間で締結された教育委託制度。第一高等学校(現東京大学)、東京高等師範学校(現筑波大学)、東京高等工業学校(現東京工業大学)、山口高等商業学校(現山口大学)、千葉医学専門学校(現千葉大学)の五校に毎年165名の中国人の

面壁十年図破壁，難酬蹈海亦英雄。
(大河の側で歌い終え東に向かう、深遠な学問は貧しい世を救うため。面壁十年 壁破ることを図る、大志は成り難くも、死してなお英雄なり。)⁵¹

3.3 個人教授と松本亀次郎

1917(大正6)年9月、周恩来は東京での留学生生活を始め、松本の東亜高等予備学校(以下、東亜学校と略称)に入学し、東京高等師範学校(翌年3月入試)と第一高等学校(翌年7月入試)を目指して受験勉強を始めた。しかし、家賃等節約のために下宿探しや引っ越しなどに時間をかけているうちにあつという間に年末を迎えてしまった。こうした中で、新年を迎え書き始めたのが『周恩来旅日日記』である。

「今日は陽暦の正月元旦で、中華民國七年である。この日記は今日から書き始める。」(1月1日)⁵²と記している。周恩来の最大の課題は「日本語習得」であった。なぜなら南開学校では、数学、物理、化学等を全て英語で勉強していたからである。そこで日記に頻繁に登場するのが「個人教授」である。先行研究では、この「個人教授」について、東亜学校校長の松本と推定されている。その根拠は、同日記に記された「個人教授」(30回)、「松村」(4回)や「松本」(1回)という多数の記述等である。この「個人教授」が松本であることを直接的に実証する資料は残っていないが⁵³、王・高橋(2002)は、その根拠として、次のような理由を挙げている⁵⁴。①日記に「東亜に行って授業に出て、個人教授のところに行く」という記述がよく出てくるが、当時、松本校長の自宅は東亜学校の敷地内にあり、簡単に行き来ができた。②日記には、極力、個人教授の名前を伏せていたが数カ所に松村先生と書いている。特に6月17日には2回目に「松本先生」と、つい本名を書いてし

官費留学生を受け入れる。費用は中国側が負担。

⁵¹ 曹(2018)前掲書 p.123

⁵² 『周恩来旅日日記』の翻訳は、主に矢吹晋(1999)『周恩来『十九歳の東京日記』』小学館文庫を引用。(下線は筆者による)

⁵³ 1923年の関東大震災で東亜学校が全焼したため。

⁵⁴ 王・高橋(2002)前掲書 pp.98-100

まっている。(1917年～1919年当時、東亜学校の教職員には「松村」という名前の教師はいない) ③ 1979年、周恩来夫人の鄧穎超が来日した際、周恩来がかつて日本留学の際に大変世話になった松本の遺族に会って謝意を伝えたいと願っていたことを周恩来に代わって松本の遺族に伝えに来た等である。また鷺山(2015)は、日記ではじめに「個人教授」と記し、後に「松村先生」となっているが「松本先生」とはなっていない理由について、当時、中国人留学生たちは日本政府の中国政策に反発していたので、校長という立場にある松本に迷惑がかかってはいけないと周恩来は考え、変名にしたと推測されること等を指摘している⁵⁵。筆者が同日記で特に注目する点は、「個人教授」の授業は主に東亜学校で行われているが「個人教授」が周恩来の下宿へわざわざ訪ねたことも以下の通り5回もあり、周恩来への期待と心配ぶりが尋常でないことが窺えることである。

①3月10日(日)「二時、日本人の松村先生がやって来、…師範の入試試験が終わってから、非常にいらだっており、七月の第一高等の入学試験は、しっかり準備しておかなければ、絶対に合格する見込みはない。合格するつもりなら、いまから勉強しなければ、絶対に可能性がない。」これは、3月4日から6日に行われた高等師範学校の周恩来の受験結果が芳しくないことを聞いた松本が心配になって訪ね、次の受験(第一高等学校)に向けて頑張る様に激励したと考えられる。

②5月15日(水)「個人教授の先生も来る。」この時期、「日華共同防敵軍事協定」⁵⁶に抗議する留学生の授業ボイコットと一斉帰国運動が起きており東亜学校も授業中止に追い込まれ帰国する学生が出ていたので第一高等学校の受験を控えた周恩来を心配して松本が訪れたものと考えられる。

③6月30日(日)「朝、読書、十時に個人教授が来る。」

④7月1日(月)「朝、物理の勉強。午後、個人教授が来て黙書。」この2日間は、7月2日～3日の受験直

前に最後の準備と激励に松本が訪れたものと考えられる。

⑤7月8日(月)「五時、個人教授が来る。」これは第一高等学校の受験状況を心配して、松本が周恩来を激励に来たものと考えられる。

以上を踏まえると、「個人教授」が松本の場合、当時2000人以上の留学生が在籍していた東亜学校において⁵⁷、なぜ校長の松本がここまで熱心に周恩来の「個人教授」をしたのかという疑問が生じる。松本が「個人教授」をしたのは周恩来一人ではなかったかもしれない。しかし、5回も家庭訪問をしているという事実をどう理解したらいいのだろうか。筆者はその理由として、松本と嚴範孫とその子息との人間関係による可能性を指摘したい。嚴範孫は周恩来に「宰相の才」があるとして大きな期待を寄せていた。また末息子の嚴智開と周恩来は親友であり、周恩来は東京で嚴智開のところに身を寄せた時もあった。日記には「季衝(筆者注：嚴智開のこと)は、…東京に来てから、情をかけてくれ、実の兄弟のように遇してくれたのだ。あらゆる援助をしてくれ、また非常に尽力してくれた。本当にどうしようもないほど感激している。」(2月3日)と記している。従って、嚴範孫または息子の嚴智開から何らかの形で松本に周恩来の「個人教授」を依頼した可能性が考えられる。「今日私の教育している学生は、いずれ中国の中心になるものと、私は信じている」との信条で中国人留学生教育に生涯を捧げた松本が、嚴範孫が「宰相の才」ありと見込む周恩来の「個人教授」をすることには運命的な「縁」を見ることができる。残念ながら受験結果は、東京高等師範学校と第一高等学校ともに失敗してしまった。その要因は、「日本にやって来て日文の程度が一年であれば勉強する者は試験に合格することができるが、私には自信がない」⁵⁸と自ら分析しているように日本語を習得する時間が不足していた。また度重なる引越に迫られ生活も不安定であった。中でも最大の要因は「日華共同防敵軍事協定」に抗議する留学生

⁵⁵ 鷺山(2015)前掲論文 p.14

⁵⁶ 「日華共同防敵軍事協定」は、1917年11月に起きたロシア革命から日中両国を守るという名目で日本政府が中国政府に提起したもので、これは中国東北部の

権益をロシアに取って代ろうとする日本政府の策謀であるとして中国人留学生が反発し抗議した。

⁵⁷ 王・高橋(2002)前掲書 p.91

⁵⁸ 矢吹晋(1999)前掲書 p.10

の授業ボイコットと一斉帰国運動に遭遇したことである。日記には「英字紙を読み、日本政府がまた二十カ条⁵⁹の要求を中国に提出したことを知る！」(4月3日)、翌日「朝、昨日の日本の要求のことを思い、なおわが政府はどうしているのか！と憤慨する」とあり、「授業のあと、長いこと新聞を読むが、国事ますます悪し…この一、二日以内に、中日新約が成立せんとしているので、このところ留学生のあいだに全員帰国の議論が起こっている。」(5月2日)とある。しかし、「今日、各省の同郷会が開かれ、留日学生全員帰国のことを議す。午後三時、数省が帰国を決定したが、私はこの件については消極反対の主義を持し、口を閉ざして言わず」(5月4日)と記しており、憂国の思いを持ちつつも日本に残留して勉強する意思が見てとれる。結局4月に「個人教授」のところに行ったのは、5日の1回のみだった。留学生の授業ボイコットと一斉帰国運動によって授業が行われなくなり、「個人教授」も心配して下宿を訪れている。5月末には再び猛勉強を開始し、6月には「個人教授」のところへ9回行き、「個人教授」も6月30日と7月1日の2回下宿を訪れて受験直前対策授業をしている。しかし、7月2日、3日の第一高等学校の受験結果も芳しくなかった。「酷暑に、故郷の情況を思う。日本にやって来たのに日本語をうまく話せず、どうして大いに恥じずにいられよう！これを自暴自棄というのだ。いかなる国を救うのか！いかなる家を愛するのか！官立学校に合格できない、この恥は生涯拭いさることができない！」(7月5日)と傷心の気持ちを日記に記している。また「五時、個人教授が来る。六時、個人教授の家に行って授業を受ける。」(7月8日)とあることから「個人教授」も周恩来を心配していることが窺われる。しかし、7月13日「朝、一高の合格発表を見に行くが、はたして不合格…予想が的中するのも不思議ではない」と記した。その後は夏休みの期間でもあり周恩来は一時帰国した。1918年9月4日に再び日本を訪れたが、それ以降の日記の記述は極端に少なく、12月23日を最後に終わっている。一時

帰国してからの考えは分からない。しかし熟慮の末、1919年4月に帰国の途に着き同年9月に新設された南開学校・大学部(南開大学)に一期生として入学した。

4.おわりに

『周恩来旅日日記』には、様々な問題に悩み苦悶しながらも、常に「祖国救済」の大志を持ち、苦難を乗り越えて奮闘する周恩来青年の日本留学の日々の生活が赤裸々に綴られている。特徴的なことは、毎日頻りに南開学校の校友達と会っているもの日本人との交流が極めて少ないことである。しかし、その例外とも言えるのが、「個人教授」(松本)である。つまり周恩来青年にとって松本は、日本留学時代の恩師であると同時に数少ない個人的な交流を重ねた日本人でもあったのである。松本は、「当今は中国の国勢が不振であるが、この国家と民族は永遠にこのままでありつづけるはずがないと信じ、私の愛慕する国家のために仕事をしようと考えて、嘉納先生が招いて下さったとき、喜んで応じたのである。今日私の教育している学生は、いずれ中国の中心になるものと、私は信じている」⁶⁰と語ったように、彼の中国人留学生教育の根底には中国に対する「敬愛」の心情があった。こうした松本という日本人教師の存在が周恩来青年の「日本観」または「日本人観」に一定の影響を与えたとしても不思議ではない。松本と周恩来の二人には共通の信条がある。それは「日華親善(日中友好)」と「共存共栄」である。松本は『遊記』の中で繰り返し「日華親善」と「共存共栄」を主張し、中国への侵略政策に反対した。しかし、その後の日本は「満州事変」から中国への侵略戦争に暴走し、最後は敗戦の結末を迎えた。松本は晩年こうした姿をみながら終戦の翌月郷里で静かに亡くなった。しかし、彼の教え子の一人である周恩来は、その後新中国の総理として、常に日本との関係正常化のために主導的立場で対処し、1972年に「国交正常化」を実現させた。もとより周恩来は日本留学から帰国後、約30年間にも及ぶ激烈

⁵⁹ 「二十ヶ条の要求」は、「対華二十一ヶ条」とは別のもので、「日華陸軍軍事協定」のことと考えられて

いる。矢吹晋(1999)前掲書 p.168 参照。

⁶⁰ 汪(1991)前掲書 pp.236-237

な中国革命と抗日戦争を戦い抜き、日本軍国主義が中国に齎した計り知れない損害を誰よりも体験していた。その上で、「極東では日本と中国との関係が平和に対して決定的役割を果たす。我々両国が友好なら双方にとって有利であり、非友好なら不利だ。我々は友好なら、共存共栄できる。友好でなかったら、生存も繁栄も脅かされる。」⁶¹と述べ、「中日友好」と「共存共栄」の重要性を強調したのである。ところで、周恩来は新中国建設に活躍する人材の中には自分と同様にかつて松本のもとで学んだことがある中国人留学生が多くいることをよく知っていた⁶²。残念ながら松本は、教え子達が新中国建設に働く姿を見ずに亡くなったが、周恩来は終生日本留学時の恩師への感謝の気持ちを忘れなかった。「いつか日本を訪れて松本先生の遺族に御礼を伝えたい」と鄧穎超夫人に語った真意には、日本留学時に「個人教授」をしてもらった恩師への感謝の気持ちだけでなく、中国の指導者として中国人留学生教育に生涯を捧げた松本に対する敬意を伝えたかったのかもしれない。周恩来は訪中した作家の井上靖に「日本は中国を侵略し、われわれに塗炭の苦しみを与えた。しかし日本には松本亀次郎のような人もいた。桜の頃に日本を後にしたが、その頃また日本へ行ってみたい。松本先生のお墓参りもしたい」⁶³と語ったという。中国人留学生が帰国後「中国の発展」と「日中友好・共存共栄」のために活躍することこそ松本が終生念願していたことであった。周恩来をはじめ教え子たちが、そのように生き抜いた事実は、「松本亀次郎の教育理念と実践」の真価を証明する一つの証左とは言えまいか。そして、いかなる時代にあっても隣邦諸国同士は、永遠に「平和友好・共存共栄」を目指していかなければならないことを、松本亀次郎と周恩来の生涯が教えてくれている。

参考文献

- 王永祥・高橋強(2002)『周恩来と日本：苦悩から飛翔への青春』白帝社
汪向榮(1991)『清国お雇い日本人』朝日新聞社

⁶¹ 曹(2018) 前掲書 p.27

⁶² 曹(2018) 前掲書 p.13, 平野(1982) 前掲書 p.285

- 金沖及 主編(1992)『周恩来傳 1898-1849』阿吡社
さねとうけいしゅう(1981)『中国留学生史談』第一書房
関正昭(1997)『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク
曹応旺(2018)『周恩来の述懐』中国出版トーハン
多仁安代(2000)『大東亜共栄圏と日本語』勁草書房
平野日出雄(1982)『日中教育のかけ橋—松本亀次郎伝—』静岡教育出版社
二見剛史(2016)『日中の道、天命なり—松本亀次郎研究—』学文社
松本亀次郎 (1931)『中華五十日遊記・中華教育視察紀要・中華留学生教育小史』東亜書房
松本亀次郎 (1939)「隣邦留学生教育の回顧と将来」『教育』7(4)岩波書店 pp.51-62
毛利和子(2006)『日中関係—戦後から新時代へ—』岩波新書
矢吹晋(1999)『周恩来『十九歳の東京日記』』小学館文庫
吉岡英幸(2005)「松本亀次郎編纂の日本語教材—語法型教材を中心に—」『早稲田大学日本語教育研究』6 pp.15-27
鷺山泰彦(2015)「周恩来の日本留学と東亜学校校長の松本亀次郎」『亜州文化』32 pp.12-25
胡鳴(2015)「周恩来留学日本与其日本観的形成—『周恩来旅日日記』解説」『日本研究』(2) pp.89-96
李錦坤, 劉玉珊, 王貴書(2006)『中日関係中的周恩来与池田大作』中央文献出版社
中共中央文献研究室・中国革命博物館(1998)『周恩来旅日日記』(影印本)中央文献出版社
中共中央文献研究室・南開大学(1998)『周恩来早期文集(上卷)』中央文献出版社, 南開大学出版社

付記

2020年8月15日、戦後75回目の終戦記念日に二人の偉人の遺徳を偲び脱稿する。

(Received:October 16,2020)

(Issued in internet Edition:November 1,2020)

⁶³ 鷺山(2015) 前掲論文 p.12